
死神の仕事

青島ゆきお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の仕事

【Nコード】

N3100K

【作者名】

青島ゆきお

【あらすじ】

死神とは

自殺しようとしている人間を助け、和解した上でその人物のために出来ることを”手伝う”存在。

だが、あくまでも手伝いであり、その人物の恨みの対象となっていない物や人間を傷付けたりしてはいけない。

また、死神はその人物には見えるが、それ以外の人間にも見えるようにするためには対象となる人間の頭上に手を当てる。

死神を殺すことが出来るのは、死神だけである。

自分の死神を目で認識できる人間は、他人の死神も見ることができ
る。

死神のルール（前書き）

この物語はフィクションです。

死神のルール

死神とは

自殺した人間の魂が死神の世界「パジリック」にて醜い姿へと変貌した後、自殺しようとしている人間を助け、和解した上でその人物のために出来ることを”手伝う”存在。

だが、あくまでも手伝いであり、その人物の恨みの対象となっていない物や人間を傷付けたりしてはいけない。

もしも傷つけた場合、その死神は永遠追放され、人間とのコミュニケーションを永遠に断ち切られる。

また、死神はその人物には見えるが、それ以外の人間にも見えるようにするためには対象となる人間の頭上に手を当てる。

死神を殺すことが出来るのは、死神だけである。

死神は自らの名前を名札に刻み、その名札を常に体のどこかに付けておかなければならない。

自分の死神を目で認識できる人間は、他人の死神も見ることが出来る。

今日もまた、死のうととしている人間が

死神のルール（後書き）

初作品であります。

前書きにもありますが、これはフィクションです。実際に自殺などしないように笑

第1部 それが始まり

5月。

今年から高校生になった あきやままなぶ 秋山学は、西南学校の屋上にいた。フェンスを越えようとしている。

「……………」
静かに景色を見渡す。学は中学時代から付き合っていた恋人を交通事故で失ってしまった。つい3日前のことだ。

「……………自分で決めたんだからな……。俺は、お前のところに……逝くつて……………」
フェンスを越えて、下を見る。その高さに、少し体が浮いた気がした。内蔵が急に重くなる感じがした後、もう一度前に出る。

「……………」
言葉が出ない。自分がなぜ、今ここでこうしているのか、もう一度考える。だが、結論が変わることなんてなかった。

そんな学を、ソレは見ていた。

学は覚悟を決めた。死ぬのがこんなに怖いものだったなんて想像すら出来ないことだと改めて知った。

足が少しずつ前に出る。そのとき、学は異変に気づいた。

頭の上に何かある……………。なんだ……………コレ……………?

黒い、大きな……………雲……………ではないな……………。いや、近くにある……………。

頭の上、すぐ近くにある……………!?

「……………これは……………なんだ……………え……………?」

声がする。後ろから声がする……………。

「……………誰……………?」

ここで気づく。上にあるものは雲じゃない。手だ。大きくて黒い、

悪魔の手。人間の頭なら簡単に包み込めるほど大きな手が、そこにある。

後ろを振り向いてみると、そこには……。

「……う……うわああああ!!!!?」

学は、ソレを見た。それは、巨人か?といつても、巨人という程の大きさもない。だが小さくもない。体は黒く、両胸から二の腕まで灰がかっている。顔は牛や馬の頭蓋骨すがいこつのようなものであり、ノの字形の立派な角、長い手足……。怪物。その言葉が一番ピンとくる。

そして、ソレは口を開く。

「よう。俺は死神の【ボルテージ】だ。とりあえず落ち着いて聞いてくれ」

「な、なんだお前!?そ、そそそんな……!いや、なんだコレ……?夢かよ、え、い、じゃ、じゃあお前、なんな、なんだよコレは……!?!」

学は完全に錯乱している。

「おいおい、ちょっとリアクションがオーバーすぎねえか?」

ボルテージは学に説明しようとするが、学は落ち着くことができない。

「とりあえず……お前が落ち着かねえと無理だな」

ボルテージは学をフェンスの向こう側からこちら側へと持ってくる。学はしばらく、その場で腰を抜かしていた。

死神の存在

「死神・・・？」

学は屋上で静かに口を開いた。

「お前が、死神だつていつのか？」

「そつだ。信じることは難しいだろうが」

学は、目の前にいる存在を死神と信じることが少しだけ出来た。

「確かにその見た目からは死神っぽいけど・・・。つてか、これ夢か？」

ボルテージが答える。

「いや、現実だ。お前が自殺しようとしたのを、俺は止めたんだ」

「・・・な、なぜ？」

ここでボルテージが【死神のルール】を説明する。それを聞いて学は複雑な顔をした。

「・・・なんでだよ・・・」

「ん？」

「どうしてだ！！俺はもう死にたかつたんだぞ！それを、お前らみたいな訳の分からん連中に止められないといけない理由はなんなんだよ！」

学はその怒りをボルテージにぶつけると、もう一度フェンスに向かおうとした。それを見たボルテージが言った。

「それが俺たちの仕事なんだ」

学は振り返る。

「知らねえよ！！意味わかんねーんだよ！死にたい人間を助けて手伝うつて？馬鹿じゃねえのか！？ふざけやがって！」

それを聞いたボルテージは、立ち上がって答えた。

「お前、本当に死にたいのか？ならなぜ、さつき飛び降りるのを躊躇した？」

「そ、それは・・・」

「怖かったから、だろ」

学は下を向き、立ち尽くす。ボルテージは続ける。

「俺たち死神は、自殺しようとしているやつを、ただ闇雲に助けるわけじゃない。まだ、生きる希望を少しでも持っている奴を助けるつまり、気に入ったやつを助けるわけだ」

学はボルテージの顔を見上げる。それを見てボルテージが言う。

「気に入ったのさ、お前を。俺たち死神は元人間。感情はお前と同じなわけだ。辛さも分かる、痛みもな。そうじゃなければ、お前が死のうとしているところなんて止めに入ったりはしなかったさ」

「……俺は……」

学は我に帰ったかのように、涙を流した。大粒の涙を。

恋人が死んだ。それは変わらない事実だが、だからといって自分が死んで何が変わるのだろうか……。そして学は決めた。生きること。

その頃、学校内では、1年3組で起こっていることが話題となっていた。廊下を歩く生徒たちの間で……。

「ねえ、3組の桜愛美さくらあいきっていう子が虐められてるの、知ってる？」

「え？今頃気づいたのかよ。結構ひどいらしいぜ。靴の中にムカデの死がい入れたり、トイレの水飲ませたりしてるってよ」

「つつか、やりすぎじゃね？」

その男女のグループの話聞いていた、話題のいじめグループのリーダー的存在である倉橋美香くわはしみかが呟く。

「ふん……。まだまだ足りないっつもの」

自殺サイト

学が自殺しようとした日から3日が経ち、土曜日になった。帰宅部の学は部活などなく、土日は完全に連休となっている。そんな学を見て、ボルテージが言った。

「なあ学。休みの日はいつもこんな感じか」

「・・・どういう意味？」

ボルテージは続ける。

「だから、今みたいに家でただテレビつけっぱなしで漫画読んだけなのか？」

学は頷いて言った。

「そうだよ。やることなんてないし。宿題も、中学とそれほど変わらないしね。月曜の朝に学校行ってからやっても十分間に合うよ」
そう言いながら、学は漫画をベッドに放ってからゲーム機に手を伸ばした。

「ボルテージ、ゲームやろうぜ」

「ゲーム？」

「そうだよ。何がしたい？」

学とボルテージは、ただダラダラとした日常を送ろうとしていた。しかし、学は前日に学校で妙な噂を聞いていた。

前日の金曜日・・・。

授業を終えて、学は同じクラスで幼馴染の話しかけられた。

なかもりたかし
中森隆と

はやしたゆうすけ
林田雄介に

「おい学。このクラスで虐めがあるんだってよ」

学はすこし驚いた。誰もが仲良く過ごしているこの1年3組で、虐めが起きているなんて・・・。
それを見て雄介が言った。

「なんだ、やっぱり知らなかったのか。お前、なんかそういつところ
鈍いよな」

学は答えた。

「それで、誰が虐められてるんだよ」

それを聞いて隆が答える。

「知らん」

「はあ？」

「いや、っつか俺だって誰かが虐められてるって聞いたただだしよ
」

「・・・」

そのときの会話を、ボルテージは聞いていなかった。ボルテージは
学に頼まれて、学が学校に行っている間は家で待機していたからだ。
だが、明らかに学の態度に不安が表れていた。

「おい学、お前昨日帰ってきたときから少し変だぞ」

学が驚いて振り向く。

「ええ？そうか・・・？」

「ああ。ま、別にいいけどな」

そう言うと、ボルテージは思い出したかのように話す。

「そうだそうだ。学、お前に見て欲しい物があるんだが」

ボルテージはそう言って、学の部屋にあるパソコンの電源を付け、
インターネットを始める。

「昨日、面白いサイトを見つけたんだ」

それを聞いて、学は眉を動かして言った。

「おい！まさか昨日、俺が学校に行っている間、勝手にパソコン使
つてたのか！？」

「ああ」

「おいおい・・・！」

学は少し焦った。パソコンの中には、学のプライベートな物がかな

り入っているからだ。思春期といえど、その量はかなりのものだ。

「見たのか？」

と、学が聞くと、ボルテージは頷いた。傷ついた顔をしている学に、ボルテージは言う。

「まあそこはどうでもいいとして」

「よくないっつーの！」

「ああああ、分かったから。俺が気になったのはコレよ、コレ」

学はパソコンの画面を見た。そこにはあるサイトが写っていた。サイトのタイトルは……。

「自殺……サイト……？」

学が言うと、ボルテージが話を進める。

「ただの自殺サイトじゃない。ここには、自殺しようとした人間が、俺たち死神と出会い、打ち解けている事実を情報としてながしてる」
「なるほどね……。で？何が気になるわけ？」

「ああ。俺は別にどうでもいいと思うんだが、今ここに書き込んでるこいつら全員、多分あと2時間後に全員死ぬ」

2時間後の悲劇

「どうということなんだ・・・？」
学はボルテージに尋ねる。

「別に死なないだろ？だって、自殺しようとしている人間は、死神に止められてしまうから・・・」
するとボルテージはこう言った。

「確かにそれが普通だ。けど、前にも言ったことだが俺たちにも感情がある。助けたいと思う感情がなければ、助けたりしない。逆に考えてみれば、このサイトに書き込んでるような下らない連中なんて、誰も助けたいなんて思わないんだよ」

学の顔が変わった。さっきまでの平凡な表情が、少しずつ恐怖を感じた顔になっていく。

「・・・つてことは・・・こいつら全員、2時間後に・・・？」
「ああ、死ぬな」

そう言うとボルテージは笑い出す。

「まったく、人間ってというのは面白い。こういう連中のために、俺たち死神がいると勘違いしてるなんてな。それよりも、お前、どうするんだ？」

「え？」
ボルテージは学に聞いた。

「いや、自殺を止めに行かないと、とか・・・」

「・・・っ！」
吹っ切れたように、学は笑い出した。

「ハッハッハッハッハッ・・・!!」

「学・・・？」
「何言つてんだよ、ボルテージ」

学はベットに放った漫画をもう一度読み始め、そのままベットに横になった。

「止めに行く？俺が？何で？そんな義理ねえよ。っつーかそいつら、要は死にたいって言ってるようなモンだろ。放っておけばいいんだよ、そんな連中」

「確認しただけでも10人ぐらいいるぞ。自殺しようとしてる場所はそれぞれ違うみたいけど」

「放つとけ放つとけ。無視しろよ、そんなふざけた奴ら」

学の声は少しだけ震えていた。今から自殺しようとしているコイツらが、死神に会えずに、ただ死んでしまう……。この事実を知っている自分がいる。

どうする……。？いや、結論は出ていた。教えたい。教えてやりたい。今からサイトに書き込めば、まだ間に合うだろう。2時間後、本当はどうなるのかを教えてやれば、この人たちを救える。自分が自分だけが……。

学はパソコンのキーボードでそのサイトに打ち込み始める。

「学、教えるのか。やっぱり放っておけないってわけだ」

「………ったりめーだろ」

サイトに事実を打ち込み終わる。自分が自殺しようとしたときに起きた現象、死神の存在、死神のルール……。2分過ぎた頃、返事が返ってきた。

573 10時02分31秒 土 パタパタ

おい、それって本当？

576 10時02分50秒 土 砂糖

ガセだろ。騙されんなんて

580 10時03分18秒 土 月曜日恐怖症

マジレス？それともガセ？

っつかマジレスだとしたらガクブル

「……マジだったの」

学はあきれたが、次の書き込みを見た瞬間、恐怖心が襲った。

581 10時04分31秒 土 あられ

マジレスだった場合の話するけど、ここに書き込んで遅くね？4人くらいはもうはりきって自殺場所で待機してるらしいし。

ただ決行時間は守るとは言ってたけどな。

冷や汗が出る。4人、サイトを見ていない……。早く伝えないと死んでしまう……。

学は自殺場所を聞き出そうとする。それを見たボルテージが言う。

「おい、まさか探しに行くって事はしないよな？」

583 10時05分09秒 土 確認者

場所どこ

584 10時07分12秒 土 あられ

××県内ってことだけは分かってんだけどな。

588 10時07分44秒 土 砂糖

お前ら釣られすぎ

どーせガセなんだから乗るな

スルーでおk

590 10時08分37秒 土 きらら

なんか怖くなってきた……。(。；)

結構マジなんじゃねーのか

592 10時09分02秒 土 ロック

あきらって奴はナイトスターホテルの屋上から飛び降りるとか言っ

てた

学は地図と財布、携帯と自転車の鍵をポケットに入れた。

4人の行方（前書き）

この物語に出てくる団体・地域は実在しません。

4人の行方

6 2 9 1 0 時 1 5 分 3 3 秒 土 ロック

あいつら大丈夫かな？なんかかなり心配になってきたんだが

6 3 1 1 0 時 1 5 分 5 6 秒 土 砂糖

釣り釣り言ってたけどちょっと不安だな・・・

俺たちも探したほうがいいのか・・・

6 3 2 1 0 時 1 6 分 2 9 秒 土 マイケル

<< 6 3 1

ツンデレ乙

学は自転車に乗り、駅を目指して走っていた。まだ2時間ほど余裕がある。だから気持ちも焦っているわけではなかった・・・。

駅に着き、切符を購入した後に一旦トイレへと向かった。個室トイレに入り、地図を広げた。

すると付いて来たボルテージが言った。

「学。話しても大丈夫か？」

「ああ。別に個室トイレなら、お前と会話しても携帯電話で通話している、周りの人間も思うだろうし、今入ってきたときには、誰もいなかったしな。それより何か気がついたのか？」

ボルテージが頷いて言った。

「ああ。ナイトスターホテルに行くつもりなんだろうけど、効率的に考えてみたんだ。ホテルに行きながら途中にあるデパートやビルの屋上も探すって言うのはどうだ？」

それを聞いて、学が不思議そうに言った。

「どうしたんだよ、急に。さっきまで、連中のこと馬鹿にしてたぐせに」

「いや、俺はお前を手伝わないと駄目だからな」
なるほど、という顔をしながら、学は答えた。

「そうだな。確かにその方が効率がいいかもしれない。だけど、それは無理なんだよ」

学は地図を指差しながら、ボルテージに言った。

「見るよ、ボルテージ。ナイトスターホテルは最寄の黒橋駅から約50分もかかる。しかも今いる坂下駅から黒橋駅までは乗り換え1回で30分もかかる。ナイトスターホテルに行ってから、別のビルを回るのが一番速いことになるんだよ。しかも黒橋行きの電車がここに着くのは10分後……。ほかに何かトラブルが起こることを考えると、十分ギリギリってわけだ。自殺サイトにいた他の連中も手伝ってくれるといいんだが……」

このとき、まだ自殺サイトのメンバーは、ただサイトの更新を待つだけだった。

学はそれも想定して行動している。ボルテージも、そのことは分かっていた。

10分……！

「やっぱりこんなに早く来ること無かったな」

とあるビルの屋上、とある男……。

風が吹き荒れる、そんな中で、その男は呟いた。

9分、8分、7分……。。

「……本当に会えるのかな、楽しみだ……」

6分。

「会えたら、あいつらビックリするだろうなあ……」

5分。

「……そんなこと、どうでもいいのになぁ……」

……2分。

「よし、そろそろ電車が来る、行くぞ」

トイレを出て、ホームで電車を待つ学。そして再び時計を見る。

あと……1分……!

時、10時25分。

雨

学は電車の中で、時計を気にしていた。

「まあそう焦るなよ、学。とりあえず、まだ1時間以上もあるんだ」

「……分かってるよ。でもさっき言ったとおり、結構ギリギリだから、少し心配で……」

ここで学が、ボルテージに話しかける。周りに客はいない……。

「ボルテージ、お前、自殺サイトを俺に見せていたときに変なこと言ってたよな」

「ん？」

ボルテージは、何のことか分からなかった。

「ホラ、お前言ってただろ。人間って言うのは面白い、俺たち死神は、こんな連中のためにいるわけではない、って……」

「……ああ、言ったな」

「お前たち死神は、もともとは人間だったんじゃないか？」

それを聞いてボルテージは言った。

「……何が言いたいんだよお前」

「……まるで、生まれたときから死神だつて言ってるようにも聞こえた……気がしたんだよ」

「……ふん」

ボルテージは溜め息をついた。

「俺たち死神も……」

そう言いかけて、ボルテージは下を向いた。

電車は一度止まり、学は電車を乗り換えた。黒橋行きの電車に乗ると、乗客がいた。一車両に8人ほどずつ乗っている。そのまま黒橋駅を目指した。

乗客がいるため、ボルテージと会話することができないまま、時間が過ぎていった。

やがて電車は黒橋駅に到着した。学は駅のホームから改札口へ急ぎ

足で向かい、

ナイトスターホテルを目指し、走り出した。するとボルテージが話しかけてきた。

「学、少し相談がある」

学は周りの人目を気にしながら、公園の公衆トイレに入った。

「なんだよ、時間がねえんだよ!」

学は感情的になった。ボルテージは言った。

「お前はナイトスターホテルに一直線に行くんだよな?」

「ああ、そうだよ、だからなんだっつの」

「俺が先に行つて、様子を見てこようか?」

それを聞いて学は言った。

「……どうやって?」

「お前、俺が死神つてこと、ちゃんと分かってないな。お前が自転車に乗つてたとき、俺は

どうやってお前を追いかけたかと思う?」

学は少し思い出してみた。そういえばそうだ。

「……たしかに、どうやって……?」

ボルテージはあきれた。と同時に、ボルテージの背中から、何かが出てきた。

さらに2本の腕か……?それにしても薄いし広い。

これは……翼だ。

「……は、羽、か……!?」

「そうさ。俺たち死神は飛べるんだ」

ボルテージは言った。学はそれを見て頷いた。

「す、すげえじゃんか……!!そうか、お前が先に飛んでいって、屋上から飛び降りるのを止めればいい!簡単なことだったんだ!」

「そこよ、俺が言いたかったこと。俺は先にホテルに行つて、男がいるかどうかを見に行つてやる」

「……?」

学は尋ねた。

「おい、なんでだ？そのまま飛び降りるのを止めればいいだろ」

「それが無理なんだよ」

ボルテージは続けた。

「俺の姿をそいつに見せれば、例の自殺サイトに間違いない今現在は、実を書き込む。お前だけしかサイトに書き込んでいない今現在は、別にただのアンチ程度に思われるだけで済むが、そいつが書き込んでしまえば、サイト内の連中の大半が信じ込むかもしれない。そうなればインターネット内だけじゃなく、全世界で話題沸騰になるかもしれないな……。そうならちまえば、人間どもは大混乱さ」

「……っ！」

学の顔を見ながら、ボルテージは続けた。

「そうならないために、死神たちはルールを作ったのさ」

「……ルール？」

「ああ。俺たちは自分の姿を、簡単に人間に見せてはいけない、っていうルールをな。ついでに教えてやるが、死神の姿を見ることが出来るのは自殺しようとしたやつだけ、という規則があるが、これは特別でな。俺がもし、お前以外の人間の頭上に手を当てて俺の姿を見せたとする。そうになると、そいつは俺以外の死神だって見えるんだよ」

「……つまり、ある死神の姿を見ることが出来るやつは、必ずその他の死神の姿も見えるってわけか……」

「そうさ」

ボルテージはさらに言った。

「分かったか？俺がお前に出会ったのは偶然でも、お前にもある程度分かってもらわないといけないことがあるってことが。人間と死神の間には、薄く、それでいてかなり複雑な壁があるのさ。自由じゃねえのさ、死神も」

学は冷や汗をかいた。結局、助けられるのは学だけ……。

そのとき、公園の外から「ザアアア……っ！」っという音と、親子の会話が聞こえてきた。

「ちょっと、雨？さっきまで晴れてたのに・・・」

学はトイレのドアを開けた。雨が降っている。それも、結構な量だ。

「雨・・・」

「学。俺はホテルを見に行くぜ。ついでに他のビルもな。状況だけでも知らせる。そのぐらいしか手伝えないってことを伝えたかった。

・・・

「・・・」

学は雨を見ながら、こつ呟いた。

「・・・頼む」

時、10時58分。

最悪のケース

ボルテージは空を飛んで、学より先にホテルを目指した。突然の雨で視界はかなり悪くなり、屋上に人がいるかどうかを確認するには、かなり近づかないと分からなかった。

ホテルまで、ボルテージの飛行速度ならば10分とかからない。

「それにしても、雨のせいで景色が全然見えないな。方向を間違えそうだ」

焦ってはいなかった。自分の命には関わらないからか……。

10分ほどが経ち、ボルテージは「ナイトスターホテル」という大きく光る文字を見つけた。そのまま屋上に向かうと……。

いた。黒いスーツ姿の男が一人……。サラリーマンだろうか？雨の中、傘をささずに立っている。もともと雨など降らないと思い、持ってこなかったのだろうか。いずれにしろ、彼はかなり濡れていた。

ボルテージはそれを見たあと、すぐ引き返した。すると、ホテルへと続く道が目に入った。おそらく、学はこの道からホテルへと行くのだろう。そう思いながら戻っていると、道の途中に、小さな赤い光が見えた。

近づいてみる。道の真ん中、赤い光か帯のように点々と置かれている。

工事だ。学がいずれ通るであろう道が、今日たまたま工事。しかもかなりの範囲で。学はこの道を通れない……。ホテルへ行けない……。

回り道を探すしかない。

どこからか、ホテルへ向かう道はないのか。この道だけじゃないはずだ。

工事の手前で左折できる……！ここからなら行けるか……？

……いや、行き止まりだ。大きな公園と民家で塞がれている。

なら右折か？右折した先には民家があり、そこからなら……。だめだ。逆に戻ってしまう……。

工事の手前の手前……。ここで右折すると、学校がある。グラウンドの大きさからして、小学校だろう。学校の裏から行けば……。行ける……。！ホテルにつながる道に出る！

ボルテージは学のところへ行つた。学は駅からかなり離れ、ビシヨビシヨになりながら走っている。そんな学を、周りにいる人たちは不思議そうに見ていた。

学が信号につかまつたのを見て、ボルテージは近寄つた。

「学、いたぞ。ホテルの屋上に男が」

「……………」

「それから、お前がホテルに行くために通る予定の道なんだが、今かなり大規模な工事をやってるぞ」

「……………！」

学は驚いている。無理もない。

「まあ安心しろ。ちゃんと別の道を見つけた。ただ、少し時間はかかるぞ」

「……………ああ」

学は周りの人に聞こえないように小さく返事をした。

「俺がナビする」

ボルテージはそう言つて、しばらく経つてから指示した。

「ここだ。ここを右に曲がれ」

例の右折する道だ。まっすぐ行くと学校があるはず……。

……。あつた。小学校だ。

「学校の裏側に行かないといけない。学校沿いに左側をまっすぐ行って、一回フェンス登つて学校の中に入れ。少し無茶だが」

「……………いや……。ずいぶん……。メチャクチャなルートだ……」

息を切らして学が言った。学校の中に入り、校舎の裏へ行こうとした。そのとき、目の前に誰かいたのに気づかないまま、学はその人

物に当たった。

ドンッ!という音と共に、学は転んだ。受身をとろうとして手を打った。手首から悲鳴が聞こえた。

「……痛つてえ……」

学は目の前の人物と目が合った。その人物は、黒い服と白いマフラー、ニット帽という、今の季節とは縁が無い格好をしていた。その人物が、男の声で言った。

「……ボルテージ、それがこいつの名前か」

「……え？」

学は一瞬、その男にしか気をとられなかったため、気がつかなかった。ソレに。

男はさらに言った。

「予定していた道が工事しているという最悪のケース。このルートを選んだ理由はそういうことだろ」

話している男の隣にいる物に、学は驚いていた。

「……し、にがみ……?」

ボルテージがそれを見て言った。

「……よっ」

時、 11時33分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100k/>

死神の仕事

2010年10月9日13時57分発行